

美を剝く魂

北大路魯山人

青空文庫

陶器だけで美はわからぬ。あらゆるものの美を知って、それを通して陶器の美もわかる。そして本当にわかるということは、本当にそのものに惚れることである。

本当に惚れることが出来るか、これが問題である。下手ものにも自分が真剣に惚れるなら、そのものの持ち味だけはわかるだろう。多くは他動的である。他人の言葉に引きずりこまれることが多い。甚だしいのは美に見えなくて金に見える。また、半分美に見えて、半分金に見えるというもある。

各自の眼には程度がある。各自の力の範囲だけしかわからぬ。従って、百人のうち一人の偉大な評価力をもったものがわかると、他の九十九人の見る美はムダになる。とかく世間にはでたらめが多い。自分ではそう感じなくてもでたらめである。

ものの美を見るのは、単に眼慰みか、それとも心の友だちとするのか。心の友だちとすることは魂と魂との交流がなくてはならぬ。そうなれば本物であり、極楽の世界である。ちようど、この頃の絵慰みのように、客向きや展覧会をねらったもののなかには美はない。どうも心臓を割られるというわけにはいかぬのが今の絵画だ。

作品が無心に作られたものであり、無我の境において作られたものであれば心打たれる。

だがなかなか無我の境地にはなれない。それには修行が必要だ。多くは虚栄心に動かされて仕事をする。これではいいものが出来るわけがない。信仰の的となる仏画は、これ最初、無落款であつた。のちに落款を入れるようになった。

こうなると信仰的崇高さは失われて玩具的になる。自分が口を極めて言うことは、とかく世間とは反対になる。美術界には掘り出しということがある。これも計らざる掘り出しをしてもらいたいものだ。掘り出しをやる人には、美が見えなくて金高が見えることが多い。それではいかぬ。

また、いいものばかりある店で、その中からいいものを求めることは容易である。安物の中から更に値切つて求めるような行き方をする人の根性は、汚なくて、いいものは集まらない。

鍋島、柿右衛門には工芸美術的なよさはあるが、精神力には欠けている。そこへ行くと古九谷には道楽氣があつて、芸術味が含まれている。無我夢中になってやった仕事には魂が入っている。古九谷と鍋島には町人と武士の違いがある。町人の道楽には案外面白いところがある。

要するに魂を剝る美が欲しい、ということである。

(昭和二十二年)

青空文庫情報

底本：「魯山人陶説」中公文庫、中央公論社

1992（平成4）年5月10日初版発行

2008（平成20）年11月25日12刷発行

底本の親本：「魯山人陶説」東京書房社

1975（昭和50）年3月

入力：門田裕志

校正：雪森

2014年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

魂を剝る美

北大路魯山人

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>